坊津一乗院における〈中央〉と〈地方〉

高橋秀城

*キーワード
紀州根来寺・一乗院諸記・聖教・覚因・亮汰

はじめに

坊津一乗院は、現在の鹿児島県南さつま市坊津町にかつて存在していた寺院で、鹿児島大乗院、鹿児島大興寺とともに鹿児島における真言宗の三本山と称されていた。[1] 山号は如意珠山と言い、寺伝によれば百済の僧日羅（?～五八三）の建立と伝えられている。和歌山県岩出市にある根来寺の別院、後に京都の仁和寺の別院として繁栄し、江戸時代に入ってからも島津氏の尊崇を集めた。

元禄年間に作成された「元禄薩摩絵図」によれば、一乗院の付近には、外国船の来航に備えた「異国船番所」が置かれている。[2] 坊津は大陸と距離的に近く、間近に異国を意識する港町でもあった。近年の発掘調査によって、一乗院跡地から中国陶磁器が出土するなど、貿易港としての坊津と大陸との交流が明らかとなっており、そこには一乗院という大寺院の関与が注目されている。

しかし、日本と大陸とをつないだ一乗院も、やがて明治の廃仏毀釈によって廃寺に追い込まれた。薩摩における廃仏の経緯について、辻善之助氏は次のように記している（傍線引用者、以下同じ）。

> 薩摩に於ては、慶応元年の頃より、夙く廃寺の具体案が作られて居た。其主張は、今や時勢は切迫してきた。寺院僧侶は不用のものである、僧侶もそれ〴〵国の為め尽させなくてはならぬ、僧侶の壮年の者が、只坐食しては済まぬ、若い者は兵役に使い、老いたる者は教員に用ふる等、其分を尽さしめねばならぬ、寺院禄高も軍用に充て、仏具は武器に用ふべしといふのであつた。（中略）坊津の一乗院の如きは、仏像仏器図画等甚多く、さながら薩南の美術館といふ姿であつたといふが、廃仏の嵐の為めに全く吹散らされてしまつたといふ。[3]

大きな勢力を誇った鹿児島の密教寺院も、廃仏毀釈によって多くの堂塔が解体され、「薩南の美術館」とも讃えられた一乗院の寺宝も悉く散逸の憂き目に遭った。わずかに、廃仏後の大正十年（一九二一）頃に坊津を訪れた武藤長平氏が、坊津には「今猶ほ一乗院遺宝の片鱗を見ることができた」[4]と述べており、巨勢金岡の筆と称する「十一面観音」や「阿弥陀如来」

図など数点の宝物を挙げているが、それらもいつしか「所在不明」[5]となっていった。

そうした中、昭和三十年代に入って、坊津一乗院に蔵されていた典籍の一部が発見された。五味克夫氏によって「坊津一乗院聖教類等」として紹介された一群には、経典などの「聖教」や、師から弟子への伝授に関する「印信」、一乗院の由来、「日本図」などが含まれており、一乗院にかかわる僧侶名や法流、典籍の伝来など、一乗院を取りまくさまざまな情報を知ることができる。[6] これまで「坊津一乗院聖教類等」については、栗林文夫氏が、聖教の奥書に根来寺の僧侶や子院の名が見出せることから、坊津一乗院と根来寺に密接な交流があったことを指摘され、[7] 福島金治氏が「坊津一乗院聖教類等」に見える聖教の伝授や集積の検討から、遠隔地との交流を論じている。[8] また、藤田明良氏は「一乗院が琉球に伸びる修験者・密教僧のネットワークの九州側の要の一つであった」[9]ことを説かれた。

さらに近年、鈴木彰氏によって、東京大学史料編纂所蔵『一乗院経蔵記』（島津家文書・写本・一冊）が翻刻紹介された。[10] 鈴木氏によれば、寛永十一年（一六三四）の奥書を持つ『一乗院経蔵記』は、「一乗院経蔵内にあった「聖教」から抜粋した聖教・典籍・宝物の目録」であり、「その内容が、文芸・宗教・有職故実・外交等にかかわるさまざまな文物の伝播、享受、再生の様相を伝える貴重な記録である」という。

この度、人間文化研究機構 国文学研究資料館（基幹研究）「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉における宗教チーム」は、東京大学史料編纂所において「坊津一乗院聖教類等」の写真帳と『一乗院経蔵記』、また坊津一乗院の宝物にかかわる『一乗院諸記』の写本を閲覧する機会に恵まれた。[11] 既に別稿において『一乗院諸記』の全文を翻刻紹介したが、[12] 本報告では、あらためて『一乗院諸記』の内容を検討することにより、一乗院の経蔵に蔵されていた宝物の伝来について考察を加えたい。

また、坊津一乗院と紀州根来寺とのつながりを手がかりとして、本プロジェクトのテーマである〈中央〉と〈地方〉の問題についても考えてみたい。時代は異なるが、根来寺もまた天正十三年（一五八五）三月の根来焼き討ちによって炎上し、堂塔とともに多くの典籍が失われている。甚大な被害を受けた両寺院の間に、かつてどのような文物の移動や人的交流があったのだろうか。〈中央〉の本寺根来寺と、〈地方〉の大寺院坊津一乗院との接点を探りながら、鹿児島における密教文化の状況を浮かび上がらせたい。[13]

一　『一乗院経蔵記』と『一乗院諸記』

東京大学史料編纂所蔵『一乗院経蔵記』と『一乗院諸記』は、ともに島津家本として伝来しているもので、坊津一乗院に伝来していた宝物名が列挙されている。[14] 『一乗院経蔵記』については、既に鈴木彰氏によって「一乗院を取りまく文芸環境」が論じられており、一乗院経蔵には、歌集や漢詩文集、唱導や絵解きに関するもの、外交手引書や天神信仰に関わる典籍などが収められていたことが指摘されている。

その他にも、例えば「世鏡抄　三巻」[15]は、延喜二年（九〇二年）偽託の

教訓書『世鏡抄』（二巻）の可能性があり、「山水抄　上中下」は、造園に関する慶算の『山水抄』（三巻一冊）のことかと推察される。

また『一乗院経蔵記』には、根来寺の僧侶と関わる典籍を見出すことができる。即ち、興教大師覚鑁（一〇九五～一一四三）の『心月輪秘釈』『五輪九字明秘密釈』『阿字秘釈』『孝養集』『一期大要秘密集』、聖憲（一三〇七～一三九二）の『聖憲阿字観私』である。幅広い典籍を収集し知識を広めながら、密教教学の基盤においては、根来寺僧の聖教を用いていたことが想像される。

さらに、『一乗院経蔵記』に挙げられた典籍の伝来を見れば、例えば『平家物語』の前に記されている『生死本源経』は、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」によれば伝本は少なく、名古屋大須文庫と西教寺正教蔵文庫の写本のみが挙げられている。[16] そこで、大須観音（真福寺宝生院）所蔵『生死本源経』（一帖）の奥書を見ると以下のようにある。

明応三季甲寅十一月令書写　定祐阿闍梨　文書写之時節　永禄十年丁卯三月吉日真光院般若寺於別当三世院法印光誉　于時天正八年庚申五月吉日石州之住僧於隅州加治木三諦寺タリノ時書写畢ス　権少僧都良円ヌ　于時天正十年二月十四日書之畢　大隅深川院本坊　権律師明誉[17]

この奥書は、明応三年（一四九四）から永禄十年（一五六七）と続き、天正八年（一五八〇）には隅州加治木三諦寺で、天正十年（一五八二）には大隅深川院本坊で書写されている。大隅国で写されていたものが、名古屋の真言寺院に伝えられているのである。今後さらに他の典籍の伝本も検討することにより、鹿児島とのつながりが浮かび上がってくる可能性がある。

次に、東京大学史料編纂所『一乗院諸記』も島津家本として伝来しているものである。一乗院に伝わる宝物名が列挙されるとともに、その由来までもが詳述されている。全体は「一乗院宝物記」[18]「一乗院由緒」「一乗院下乗碑」「一乗院鐘銘」の四つに分けられ、「一乗院宝物記」には内題に「如意珠山宝物開帳述記」とあり、六十四の項目が挙げられている（以下、便宜的に丸数字を付した）。奥書はないが、途中、「波止土濱舎利一粒」（八丁裏）の由来には、「宝暦／十年為僧正任官上京、砌依不測之縁求得之依／之奉納経庫永為宝物者也」（改行は／で示した）として宝暦十年（一七六〇）の年紀が見えることから、江戸時代中期以降の成立と思われる。宝暦十年（一七六〇）に一乗院第二十九世尊盈が僧正に任ぜられており、その折に宝物として舎利が納められたのであろう。

はじめの「一乗院宝物記」（如意珠山宝物開帳述記）に注目すれば、冒頭（①）の「仏牙御舎利」は、先の『一乗院経蔵記』に見える「釈迦ノ御歯」と対応している。『一乗院諸記』では伝来の由来が詳細に書き留められており、それによれば、応永二十三年（一四一六）に仁和寺智恵門院の有海僧正から一乗院第四世頼俊上人に授けられたものであることが分かる。

また、二つ目（②）の「水精自然石ノ御舎利」は、『一乗院経蔵記』の「自然石ノ御舎利」と対応している。『一乗院諸記』には、舎利は一乗院開山の日羅上人が金峯山において感得したもので、一度消え去った後、明応七年

（一四九八）に一乗院第六世頼政上人が再び感得したものと伝えている。

その他の宝物も、さまざまな場所から一乗院に寄進されている。例えば、唐土（④「地蔵造菩薩埴像」⑱「羅漢袈裟」）、東寺宝菩提院（⑪「護身毘沙門天像」）、仁和寺（⑩「弁財天埴像」㉝「波止土澁舎利一粒」）、高雄山神護寺（⑫「五智金剛鈴」⑭「五股金剛宝杵」）、下総国西光寺（㉒「聖徳太子御自作ノ木像」）、伊佐海蔵院（㉓「毘沙門天王ノ木像」）などを見ることができる。

中でも仁和寺は注目され、後半には「仁和寺智恵門院宥海以座論梅聖教右書籍四／十匣附属当山第四世頼俊」として、一乗院第四世頼俊が仁和寺で修行した際に書籍四十函を託され、一乗院に安置したことが書き記されている。根来寺とともに仁和寺聖教の流入をうかがうことができるのである。

その他、興味深い記事として、（㉚）「中将姫ノ舎利ノ伝記　一巻」が挙げられる。中将姫の伝記に続けて、正平二年（一三四七）の奥書を持つ「如来乃歯の舎利之流記」が漢字平仮名交じりで記されており、『一乗院経蔵記』記載の「中将姫ノ法華経」「当麻曼荼羅一幅」「縫阿弥陀一幅中将姫」とあわせて興味深い。

『一乗院経蔵記』の「御宸筆ノ短冊」は、㊾「後奈良帝天筆ノ御短冊」と対応する。天文十四年（一五四五）に一乗院第八世頼忠が、後奈良天皇（一四九七～一五五七）より下賜されたものであることが分かり、短冊にしたためられた和歌十首が並べられている。

一乗院の宝物については『一乗院諸記』『一乗院経蔵記』の他にも、一乗院第二十六世快宝（延享年代〔一七四四～四八年〕）の『一乗院宝物記』や、薩摩藩が編纂した『三国名勝図会』（天保十四年〔一八四三〕刊）に見ることができる。それらを相互に検討することにより、一乗院の寺宝伝来の経緯がより具体的に浮き彫りとなるであろう。

二　根来寺と坊津一乗院

本節では、坊津一乗院と紀州根来寺にかかわる記述を取り上げ、〈中央〉と〈地方〉における文物の移動や人的交流について考えてみたい。

『三国名勝図会』には、坊津一乗院が紀州根来寺の別院となったこと、第四世頼俊上人が根来寺学頭快憲僧都に随ったこと、根来寺焼き討ちの際には覚因という僧侶が根来寺の寺宝を一乗院に將したことなどが記されており、坊津一乗院と紀州根来寺との密接な結びつきをうかがうことができる。ただし、頼俊上人が随ったという「根来寺学頭快憲僧都」[19]については、根来寺の「大伝法院学頭血脈」等にその名を見出すことができない。「快憲」という名は、ほぼ同時代の大伝法院学頭聖憲（一三〇七～一三九二）の「憲」の字と、快深（一三六八年頃）の「快」の字を併せ持ったような名前となっており注意される。

入来院家所蔵の『日本帝皇年代記』には、

乙夘（一五五五）弘治　坊津一乗院塔供養千部会、自十月十八日、四月二日帖佐嶋津貴久知行[20]

と一乗院での塔供養の記事があり、その頭書には、

七月二日鳥羽院四百回忌於大伝法院有大曼荼羅供、道〔導〕師小池坊
玄誉法印左学頭

として根来寺における曼荼羅供法要の記事が書き留められている。山口隼正氏によれば、入来院家は鹿児島において島津家に次ぐ一族であり、『日本帝皇年代記』の記述には「高野山と根来寺の僧侶の生没記事が多いが、とりわけ頼瑜（高野山中性院始祖、根来寺初代学頭）に因んで、中性院流と根来寺学頭関係が多い」ことを指摘している。根来寺と鹿児島とのつながりがあったことを示すものであろう。[21]

また、天正十三年（一五八五）の根来焼き討ちの際に、多くの寺宝を一乗院に運び込んだとされる覚因という僧侶にも注目したい。覚因については、栗林文夫氏が「覚因は出家して真言僧となり俊彦坊と号した」ことを指摘している。[22] ここで気になるのは、大和長谷寺小池坊十一世亮汰（一六二二～一六八〇）の伝記である。

師名亮汰。字俊彦。（後改伊泉） 姓蠶氏。薩州田布施高橋人。年甫九歳。入二平井寺一。為二盛印弟子一。剪髪受戒。駈烏歳。印公試授レ之読二シムル理趣般若一。半日ニシテ終レ巻。宿植機宇。聡利過レ人。生質清爽。口離二綺語一。志学師二事一乗院覚因一。（中略）年十八而解レ纓赴洛。與二文俊良俊一相共同レ舶。[23]

（『豊山伝通記』「第十一世亮汰僧正伝」）

亮汰は、薩摩国田布施の高橋（現在の金峰町高橋、加世田市高橋）に生まれ、字を俊彦と名乗っていた。九歳にして田布施村にある一乗院末の平井寺に入り、盛印の弟子となり、やがて本寺である一乗院の覚因に師事している。この記述によれば、亮汰（俊彦）と覚因は、別人となるのである。[24]

亮汰が入った平井寺は、『江戸幕府寺院本末集成』に、

一一乗院（河辺郡坊津村） 本寺御室仁和寺 末寺 （中略） 金蔵院（河辺郡田布施郷） （中略）
右之金蔵寺末寺 平井寺（河辺郡田布施村）[25]

と見え、一乗院の末寺金蔵院のさらに末寺に当たる。一乗院は、根来寺や仁和寺から見れば〈地方〉寺院だが、坊津においては多くの末寺を有する〈中央〉本寺でもあり、亮汰はその縁を頼って一乗院の覚因に師事しているのである。

この俊彦については、智積院新文庫所蔵『真俗雑記』（二十五冊）の書写者の一人としてその名を見ることができる。因みに『真俗雑記』は、根来寺の教学を復興した頼瑜（一二二六～一三〇四）が著したもので、寺院における秘説を問答形式によって記録している。中には頼瑜自身の和歌や漢詩、夢想の記事や和歌の作品の目録である歌書目録、また『古今著聞集』や『沙石集』などの説話との類話が見出せるなど、頼瑜の文学活動とともに根来寺における文学活動をうかがうことができるものである。中でも新文庫本『真俗雑記』は、十五人が手分けをして書写しており、全二十五冊の書写者を挙げれば以下のようになる。

薩州俊彦（第一・六）、薩州深識（第二・十三）、薩州文空（第三）、薩州深秀（第四）、薩州秀存（第五・二十四）、薩州文鏡（第七）、薩州頼順（第八・九）、薩州長淳（第十・十九）、薩州文啓（第十一・十七・二十三・二十五）、薩州及芸（第十二）、薩州慶音（第十四）、薩州文識（第十五）、薩州俊尭（第十六・二十二）、薩州俊良（第十

八・二十一)、琉球国深圓(第二十)

書写者の多くは「薩州」の僧侶であり、中には「琉球国」の僧も見ることができる。ここで注目されるのは、一冊目と六冊目を「薩州俊彦」が筆写していることだろう。第一冊(巻二)奥書には「薩州俊彦書〈覚眼師祖覚因也〉」(割注は〈〉で示した)と見え、亮汰とほぼ同時期に薩摩に生まれ、鹿児島大乗院で出家、後に智積院第十一世となった覚眼(一六四三―一七二五)の名も見える。覚眼の師が覚因であるという割注は、薩摩の僧侶のつながりを知る上でも注目されよう。[26]

なお新文庫本『真俗雑記』は、もとは根来寺十輪院から高野山へと伝わり、寛永十六年(一六三九)に隅州般若寺で書写されて、再び京都の智積院へと將されている。その後、新文庫本は、奈良や、遠く佐渡、関東など全国で繰り返し転写され、それは『真言宗全書』本の底本にも連なっている。[27]

この時期の薩摩出身の真言僧侶には、豊山八世快寿(一六一四～一六六六)、豊山十三世卓玄(一六三三～一七〇四)、智積院十三世快存(一六四七～一七二四)、智積院第三臈席に就いた専音房(仙音房)頼正(?～一六七三)などを挙げることができる。新義真言宗の要職に就いた僧侶も多く、薩摩の学問の水準の高さが知られるとともに、〈中央〉寺院とのつながりも垣間見える。

また現在、真言宗智山派末寺の聖教として、坊津や一乗院で書写されたものが全国の寺院に残されている。

①「文明九年三月二十八日於醍醐寺三宝院書写之　薩州房津金資頼政」[28]

(『〔髄抄〕』神照寺(三江教区))

②「元禄六年霜月四日以摩尼珠院忠俊自筆之本写之兼澄」

(『当日早旦調支具イ水』円明寺(愛媛教区))

③「本紙岩城薬王寺有之此写ハ薩摩大乗院義忍筆者也」

(『〔弘法大師再誕証文〕』幸蔵寺(下総海銚教区))

以上のような点からも、人と書物の移動による〈中央〉と〈地方〉の往還を見て取ることができよう。

おわりに

今後の課題として、以下の二点を指摘しておきたい。

根来寺とのかかわりからすれば、根来寺第七代学頭である頼豪(一一二八～一三六〇以降)に『束草集』という著作がある。これは、仏教の儀式に用いる願文など、僧侶の模範となる文例を集めた書であり、十四世紀の根来寺教団の様相がうかがえる史料だが、そこには例えば「蓮花院月次和歌序」[29]として、頼豪が住んでいた蓮花院において、毎月の歌会が催されていたであろうことが知られる。『束草集』には「人麿影供祭文」なども残されており、根来寺において漢文や和歌の制作といった文学的環境が整っていたことがうかがえる。

『一乗院経蔵記』には根来寺僧の著作や、鈴木彰氏が指摘するように歌集など文芸にかかわる書物を見ることができる。こうした坊津一乗院の文芸的な活動は、「坊津一乗院聖教類等」に根来寺僧や子院の名が見出せることからも、根来寺の別院としての影響のもとに育まれたものではなかっ

ただろうか。

また仁和寺とのつながりから、坊津一乗院には仁和寺西院信證（一〇八八～一一四二）を祖とする「西院流血脈」[30]が伝わっている。

法眼院宥信證・・・能禅（大僧都院法印）・・・亮禅（宝菩提院長者僧正）―頼我（宝護院法印）―宏蓊（宝蔵院法印）―

宏寛（宝菩提院法印）―教済（岡院法印）―俊雄（岡院法印）―亮恵（岡院大僧正）―禅我（岡院権僧正）―

亮秀（金剛院院権僧正）・・・実応（備州口口院正僧正）―快鑁

（「西院流血脈」（「坊津一乗院聖教類等」コ―18（4））

この血脈の中で、東寺宝菩提院六世俊雄（一四五五～一五一六）は、東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』の著者である。この史料には、僧侶として出家する以前の十五歳までに稽古すべき典籍が列挙されており、説話・伝記・軍記・縁起・絵巻・お伽草子など幅広い作品が採録されている。[31] 一乗院には先に見た『世鏡抄』のような教訓書も見られ、諸宗兼学的な幅広い典籍が収められているが、こうした幼童期に様々な文学作品に親しむ学問方法の土壌が、坊津一乗院においても存在していたのか興味深い。

以上、本報告では、雑駁ではあるが、〈中央〉としての根来寺や仁和寺と、〈地方〉の大寺院である坊津一乗院との文物の移動や人的交流、またそこから全国へと広がる密教文化の状況について考えてみた。坊津一乗院は、都から離れた〈地方〉ではあるが、大陸側を視野に入れればそれは〈中央〉となる。坊津一乗院は、海路や陸路による広域に及ぶネットワークの結節点としての重要な役割を担っていたのであろう。

注

（1）坊津一乗院・鹿児島大興寺に、伊集院荘厳寺（現日置市）を加えて鹿児島藩真言宗の三本山とする場合もある。

（2）国立公文書館蔵「元禄薩摩絵図」（国立公文書館デジタルアーカイブ（https://www.digital.archives.go.jp/）参照）。なお、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館編『海上交流の軌跡』（輝津館企画展図録論集、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、二〇一二年一〇月）に解説があり、「この海域が海防の最前線と認識されていたこと」が指摘されている。

（3）辻善之助『明治仏教史の問題』（立文書院、一九五九年一月）。

（4）武藤長平「坊の津と山川の津」（「歴史と地理」七（一）、一九二一年一月）に「坊の津に採訪すると今猶ほ一乗院遺宝の片鱗を見ることができる。即ち巨勢金岡の筆と称する「十一面観音」、阿弥陀如来」、弘法大師筆と称する「如意輪観音」、島津光久寄附の「愛善明王図」、苔公筆と称する「妙法蓮華経普門品二十五偈関」、筆者未詳の「涅槃図」（中約一間半位）等の如きである」と見える。

（5）坊津町郷土誌編纂委員会編『坊津町郷土誌』上下（坊津町、一九六九年一二月（上巻）、一九七二年一二月（下巻））参照。『坊津町郷土誌』には、当時鹿児島県史調査委員であった武藤長平氏が調査した「坊泊現有一乗院関係宝物」が挙げられている。

（6）五味克夫「坊津一乗院跡と一乗院関係史料」（「坊津町埋蔵文化財発掘調査報告書」（1）一乗院跡』坊津町教育委員会、一九八二年）、同「坊津一乗院聖教類等」（「鹿児島県文化財調査報告書」三九、一九九三年）。なお近年、福島金治編『坊津一乗院聖教類等目録』（南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、二〇一五年三月）が刊行された。

（7）栗林文夫「坊津一乗院の成立について」（「黎明館調査研究報告」一八、二〇

〇五年）、同「根来寺と坊津一乗院」（「和歌山地方史研究」四九、二〇〇五年七月）。

（8）福島金治「密教聖教の伝授・集積と隔地間交流―「坊津一乗院聖教類等」の検討を通して―」（「九州史学」一六〇、二〇一一年一〇月）。

（9）藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流―『一乗院来由記』所載の海外交流記事を中心に―」（『境界からみた内と外』岩田書院、二〇〇八年一二月）。

（10）鈴木彰『『一乗院経蔵記』にみる坊津一乗院と中世文芸―地域社会における文芸環境―」（「立教大学日本文学」（小峯和明教授 定年退職記念号）一一一、二〇一四年一月）。また関連する論考として、鈴木彰「「伜文」の生命力と再生する物語―薩摩・島津家の文化環境との関わりから―」（「中世文学」五七、二〇一二年六月）参照。

（11）研究代表者：国文学研究資料館・寺島恒世。宗教チームのメンバーは、落合博志・齋藤真麻理・小助川元太・高橋悠介・髙橋秀城。二〇一三年八月二十二日に「坊津一乗院聖教類等」（写真帳）、『一乗院経蔵記』（島津家文書）、『一乗院諸記』（島津家本）を閲覧した。本報告は、本プロジェクトの成果の一部でもある。

（12）拙稿「東京大学史料編纂所蔵『一乗院諸記』翻刻」（国文学研究資料館「調査報告書」三十六号、平成二十八年三月）。

（13）その他、一乗院の典籍にかかわる主な先行研究に以下のものがある。坊津歴史資料センター輝津館編「坊津―さつま海道―」（「坊津歴史資料センター輝津館、二〇〇五年一〇月）、橋口亘「坊津歴史資料センター輝津館所蔵「日本図」」（「地図中心」三九二、二〇〇五年五月）、野田泰三「坊津一乗院聖教類等所収「日本図」について」（『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』（京都大学学術出版会、二〇〇七年三月）、赤塚祐道「薩摩坊津一乗院と紀州根来寺」（『真言密教と日本文化』加藤精一博士古稀記念論文集、ノンブル、二〇〇七年一二月）。

（14）鹿児島県歴史資料センター黎明館 黎明館企画特別展『祈りのかたち―中世南九州の仏と神―』（「祈りのかたち」実行委員会、二〇〇六年九月）に、『一乗院諸記』『一乗院経蔵記』をはじめ、「坊津一乗院聖教類等」の聖教の一部の写真が掲載されている。なお、島津家本については、朴澤直秀「「島津家本」の構成と形成過程」（「東京大学史料編纂所研究紀要」八、一九九八年三月）参照。

（15）『一乗院経蔵記』の引用は、前掲注（10）書、鈴木氏の翻刻に拠る。

（16）国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録データベース」（http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html）参照。

（17）引用は、智山伝法院編『大須観音真福寺文庫撮影目録 下巻』真言宗智山派宗務庁、一九九八年三月）に拠る。

（18）引用は、東京大学史料編纂所蔵『一乗院諸記』（島津家本さII-12-36）原本に拠る。

（19）引用は、『三国名勝図会』（青潮社、一九八二年八月〔明治三十八年刊の複製〕）に拠る。

（20）山口隼正「『日本帝皇年代記』について―入来院家所蔵未刊年代記の紹介―（下）」（「長崎大学教育学部社会科学論叢」六六、二〇〇五年三月）。

（21）なお、『日本帝皇年代記』には、和歌の記事も多く見ることができる。勅撰集の記事のみを抜き出せば以下のようにある。

乙丑五　古今集廿巻歌数千首大納言紀友則・貫之（紀）・躬恒（凡河内）・恵岑（壬生）書奏之、

辛亥五　後撰集廿巻歌数千四百廿首撰之、

丙申二　拾遺集并短歌抄此年号之中撰之、花山院御自撰也云云、

乙丑二　後拾遺集奏之、通綱書之、

申辰天治　金葉集十巻歌数六百四十九首撰之、

甲子天養　詞花十巻歌数四百九首三位顕輔撰之、

乙丑二　三月廿六日新古今廿巻歌数千九百七十八首撰奏之、通具

・有家・定家・家隆・雅経作也、

こうした文芸環境について、例えば、坊津には近衛信尹（一五六五～一六一四）も訪れており、僧侶のみならず、こうした貴顕の人物によって、様々な文化的なものが鹿児島に將されたことが想像される。また坊津で言えば、近衛家の荘園坊津と都との行き来も考えなければならないだろう。

(22) 前掲注（7）書、「根来寺と坊津一乗院」に拠る。

(23) 引用は、『大日本仏教全書』（第六十八巻）所収のものに拠る。

(24) 本稿と関連するものに、拙稿「智積院蔵『真俗雑記問答鈔』について」（「智山学報」五四、二〇〇五年三月）があり参照されたい。

(25) 引用は、『江戸幕府寺院本末集成』（雄山閣、一九八一年十一月）に拠る。

(26) 引用は、智積院新文庫蔵『真俗雑記』二十五冊、寛永十六年（一六三九）写原本に拠る。

(27) 拙稿「頼瑜撰『真俗雑記問答鈔』諸本概略」（大正大学綜合佛教研究所『真俗雑記問答鈔』の翻刻・校訂研究会編『〈頼瑜撰〉『真俗雑記問答鈔』の研究』（大正大学綜合佛教研究所叢書第二十七巻、ノンブル社、二〇一二年二月）において、『真俗雑記』の転写過程を示した。

(28) 引用は、『真言宗智山派所属寺院史料撮影目録』一～四巻（真言宗智山派宗務庁、二〇〇七年三月）に拠る。

(29) 引用は、川崎大師教学研究所 東草集研究会編「『東草集』訳註研究」（川崎大師教学研究所叢書、第二巻、二〇一四年三月）に拠る。

(30) 引用は、南さつま市坊津歴史資料センター輝津館蔵「坊津一乗院聖教類等」写真帳に拠る。

(31) 『連々令稽古双紙以下之事』については、これまで以下の考察を試みた。拙稿「東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』筆録者考―東寺宝菩提院俊雄の可能性―」福田晃・中前正志編『唱導文学研究』第八集、三弥井書店、二〇一一年五月）。関連するものに以下の拙稿がある。「東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』をめぐって―室町末期真言僧侶の素養を探る―」（「佛教文学」第三一号、二〇〇七年三月）、「幼童の稽古―東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』にみる文学書・付影印―」（「智山学報」第五六号、二〇〇七年三月）、「信仰受茶羅―仏教と文学―」（「佛教文學」第三六・三七合併号、二〇一二年四月）。

【付記】

本稿は、人間文化研究機構 国文学研究資料館（基幹研究）「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」（研究代表者：国文学研究資料館・寺島恒世）シンポジウム「文芸・宗教における九州―〈中央〉と〈地方〉との関わりから―」（於・国文学研究資料館 調査員会議）における研究報告をもとに成稿したものです。席上、御教示を賜りました諸先生方に深謝申し上げます。